価値あるしくみで
応えるITパートナー
DAIKO XTECH

CHIBA UNIVERSITY PRESS

江戸川大学
ユニバーシティプレス

大学生記者が編集

海洋ゴミ、一面に散乱

銚子の市民団体ら

きれいな砂浜へ拾い続ける

断崖絶壁が連なる屏風ケ浦を右手に、穏やかな波が打ち寄せる銚子マリーナ海水浴場。きれいに見えた砂浜の中に、細かなプラスチックが無数に埋もれていた。

世界経済フォーラム（WEF）によると、2050年には海洋プラスチックごみの量が、海にいる魚の量を上回ると報告されている。私たちは、その実態を調査するため、日本有数の水産都市である銚子でゴミの回収に取り組む市民団体の活動に参加した。

「車に乗って長崎海岸　内してくれたのは、「Oceanlife Community14」代表の宮内幸雄さんだ。2020年に海洋ゴミ回収プロジェクトを開始し、今年で6年目になる。

に移動します」。そう案



海岸のごみを拾う宮内さん＝川邉こころ撮影

長崎海岸に着くと、漁網やロープの他、ペットボトルや発泡スチロールが散乱していた。ここ長崎海岸は、すぐ沖合で黒潮と親潮が合流するため、多くのごみが集まってくるのだという。常連のボランティア3人と関心のある高校生を含む9人が参加。30分間の活動の中で、45Lの袋25袋分のごみを回収することができた。しかし、ごみはどれだけ拾っても無くならない。顔を上げると一面に散乱するごみの光景は、自分の目で見て、初めて突きつけられた現実だった。

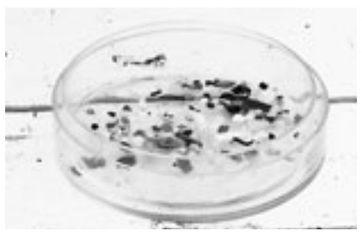
鯨が教えてくれた現実

ロープ絡み泳ぐ姿衝撃

もともと水族館の専門員だった宮内さんは、自然の中での生き物の姿を知ってもらおうとホエールウォッチングを開始。7年前、その活動中に、赤いロープが絡みついたクジラを発見した。宮内さんは、このような姿を目にするのは初めてだったといい、衝撃をうけたという。「海に出るとゴミはありました。20年以上海に出ていながら、海そのものの問題を見ていなかったんです。改めてこの現状を目の当たりにして、もう一回足元から見直そうと思いこの活動を始めました」と語る。

宮内さんによると、プラスチックゴミを含めた海洋ゴミの7割は、街のゴミが風に飛ばされるなどして川に入り、海に流れ着いたものだという。さらに、この活動を通してゴミを見てもらい、拾ってもらうことで参加した人の意識が変わっていくことにも気がついたそうだ。「安易にゴミを捨てない、見つけたらすぐに拾うなど、個人の意識が大事」と熱く語った。

（高橋澄玲）



砂浜の砂を50㌢四方の網でふるいにかけた際に採取された、マイクロプラスチック片＝川邉こころ撮影

身近な自然守る

海は夏になるとレジャーを楽しむ場、友人や家族と訪れる思い出の場所になったり悩んだ時にはリフレッシュや気分転換できる場所である。その一方で海洋ごみなど様々な課題もある。そんな海を守るために活動する人々への取材を通して海の現状やこれからについて考えるため取材を行った。

県内の取り組み紹介

（高柳梨花）

レイアウト 石塚凪紗 柴原未奈



市民の憩いの場になっているいなげの浜＝國井美月撮影

いなげの浜

波に削られる人工海浜

継続的な清掃欠かせず

千葉市美浜区にある「いなげの浜」は、日本初の人工海浜として知られている。今回、稲毛海浜公園を管理する中央・美浜公園緑地事務所を取材し、砂浜侵食の現状や維持管理について話を聞いた。

いなげの浜は、埋め立てによって失われた海辺を取り戻すことを目的に整備された人工海浜である。様々なイベントが開催され、多くの人が訪れる場所となっている。

担当者の田邊祐介さんによると、砂浜では潮流や波の影響と思われる侵食が発生しているという。削られた砂は海底にたまったり流出したりしており、過去には砂の補充も行われた。現在も砂浜をならす作業などを行い、環境の維持に努めている。

稲毛海浜公園は清掃や樹木管理、芝生管理、砂浜管理などが実施されており、年間1億円以上の費用がかけられている。特に台風の後などは浜辺に漂着ごみが多く流れ着くため、継続的な清掃が欠かせないという。

浜にはアサリやカニ、野鳥など多くの生き物が生息している。生物調査や海底の測量を定期的に実施し、環境の変化や生態系への影響を確認している。田邊さんは「海辺は千葉市の大切な地域資源の一つ」と、環境保全の重要性を強調した。

今回の取材を通して、いなげの浜は多くの人の管理や努力によって維持されていることが分かった。砂浜侵食という課題と向き合いながら、海辺の環境を守る取り組みが続けられている。

（波多野楓希、岡村珠羽）



沖ノ島で森の再生活動に取り組むたてやま・海辺の鑑定団のメンバー＝野村陸人撮影

館山、再生プロジェクト

森から海へ恵み循環

夏場は多くの海水浴客が訪れる館山市の沖ノ島は、対岸の陸地と砂州でつながる陸続きの無人島だ。島に一歩足を踏み入れると、海辺のにぎわいが消え、緑豊かな森が広がる。

だが、数年前に一度その姿を大きく変えてしまったことがある。2019年9月の台風15号によって、神社のご神木をはじめとした多くの木が倒れ、森が一夜にして消えてしまったのだ。

この状態を解決しようと立ち上がったのが、竹内聖一さんをはじめとした「たてやま・海辺の鑑定団」の人たちだ。もともと南房総の自然資源を活用した「環境教育プログラム」を実施していたが、50年後の森の再生を目指して再生活動を開始した。

倒木や危険な枝を取り除いて、島の土壌の上に積み重ねた。微生物分解を促して土に戻し、島の栄養を循環させるためだという。観光客のための遊歩道を、雨水が浸透しやすい石畳にすることで、倒木の原因となった土壌の乾燥を防ぐ。こうして台風に負けない健康な木が育つ土台を整えた。

現在は再生活動が実を結び、台風で倒れた樹齢300年を超えるご神木の根元から、上へ上へと枝葉を伸ばす新たな命の姿があった。森がスポンジのように雨水を吸い込み、浸透して地下水となる。そして森の栄養をたっぷり含んだ地下水が海に滲み出し栄養が与えられることで海の自然も保たれる。こうした活動を「森を守ることは海を守ることにも繋がる」と竹内さんは語った。

（野村陸人）



沖ノ島で自分の身の回りのことから考えてほしいと語る竹内さん＝丸尾天獅撮影

活動の幅広げ 地域に貢献

たてやま・海辺の鑑定団は、森林の再生活動だけでなく、子どもから大人までを対象にした自然体験プログラムも実施している。「環境問題を自分事として考えてもらいたい」という思いからだという。

最近では、館山市と提携したり、セブン・イレブン記念財団の支援を受けたりするなど、活動の幅が広がってきた。多くの人たちに来てもらい、環境を守ることの大切さを共有し、思いを共有した人たちの輪が広がることが新しい価値を生み、地域の活性化にもつながる。そんな活動を模索していきたいという。

（木庭遥之）